
夏休み戦争

哭人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏休み戦争

【Nコード】

N9027B

【作者名】

哭人

【あらすじ】

高校最後の夏休み。俺はそんなありふれていて、貴重である時間をただ怠惰に過ごしたいただけだった。しかし、不可抗力で極めて理不尽に妙なことに巻き込まれる。そんな、夏休みの戦いの記録である。

1話 コンビニに行こう(前書き)

自分自身手探りで話を進めているので正直どうなってくるかわかりませんが、一生懸命書きますのでどうか見守ってやってください。
文章力がほしい!!

1話 コンビニに行こう

夏。

遠く透き通った蒼い空に、沸き立つ巨大な入道雲。

蝉はせわしなく鳴き叫び、その声と同じくらい元気な小学生4、5人が俺の横を走りすぎた。

楽しそうである。

夏休み、入ったもんなあ…。

「いいなあ、…若いつて」

年寄りくさいことを呟きながら、俺は制服のワイシャツのしわを少しのばして、肩から下げた学生鞆をもう一度かけなおした。

「はあ…。俺の、夏休みはあ…？」

夏休み4日目だというのに、『大学受験生』という要らぬ肩書のせいで夏期講習なんてものに出る羽目になった。

そんなことのためにわざわざ高校に出向き、眠い授業を受け、今現在は、クーラー潰けの身体には厳しい猛暑の中を徒歩で帰宅中である。

講習で隣の席だった野球部の友人は、今日は風があって涼しいくらいだぜ！なんてことを言っていたが、

年中外で走り回っているような奴らの体感温度と一緒にされては困る。

……、やっぱり、暑い！

汗を腕で少し拭い、歩を進めた。

まだ学校の門を出て500mも歩いていないが、汗は流れ落ちるば

かりである。

なんだよ夏。コラお前夏。もう少しクールに生きられないのか夏よ。

そんなことを考えながら、とりあえず近くのコンビニに入ることにした。アイス食べたい。

目的のコンビニは、学校からあまり離れていないので学校帰りによく利用する。

コンビニというものは本当によく冷房が効いており、涼むには最適だ。

所持金は500円程の筈だが、暑いせいでアイスが食べたくなくなってしまったのだから仕方がない。良い度胸してるな夏。

コンビニの入口前には黒いトラックが停車していた。

暑い熱を帯びていて、もう見るだけで暑苦しい。

こんなのに乗っていたら、中の人はずっと蒸し暑いだろうなあ、なんて、少し同情した。

でもアンタ、車停めるとこそ自転車用ですよ。

そんなこんなで、俺はコンビニに入ったのだった。

いらっしやいませー

店員のあまりに素っ気ない挨拶を通り抜け、

まったくこのコンビニのスタッフ教育はどうなってるのか、なんてどうでもいい事で苦笑いしながら店内を見回した。

ふと、見知った顔があることに気付く。

バックジュースのコーナーに居るのは同じクラスの遠山だった。

気付いていない様子の遠山に後ろからそうっと近づき、肩を叩く。

「とーやまー!!」

「うわっとおだしや! な、なんだ、お前かあ!」

声をかけると、間髪入れずに想像以上のリアクションが帰って来た。

「うわっただしやーってなんだよお前: やっぱり変だなあ」

変だと言われたことに対し必死になって否定している遠山だが、言動の変さに比べ見た目はかなり凛々しい。

男前とでも言うべきだろうか?

美形、というわけではないが、なんかこうカッコイイものがあるのだ。

モテないんだけどね。

そういえば遠山は剣道部の副部長らしいのだが、その肩書は伊達では無いらしい。

本当に、結構できるのだがトップではなく、トップではないが割とやるらしい。

モテないんだけどね。

「というわけからしてな、条件1・2・3から、結論、俺、まとも!なんだよ! な? わかるだろー」

「いや、わからん。お前そこが変なんだよ。」

「な! な! お前エー!」

他愛のないいつも何度もしている会話の繰り返し。

だが、今暑さでストレスが溜まっている俺には重要なストレス発散である。

「あれ、お前今日剣道部は?」

「んー、今日は部活動停止だよー、どの部もやってないはず。」

遠山はそう言うを目を雑誌コーナーに向けた。

「ほら、あそこ。野球部の一年もいるだろ？」

それから、駄菓子の中には女子テニス部の子居るし。あとあのレジに居るのは確か美術部のー…」

「本当にどの部も休みなんだなー。学校で何かあるのかあ？会議とか？」

俺はそこそこに相槌を打ちながら、アイスコーナーを目指した。

アイスのケースは、他の棚に隠れており、入口から1番見えにくいところに置いてあった。

お、あんな死角に隠れていやがったか。

甘い、甘すぎるぞ、チョコレートアイスよりも甘い。

今やアイスを求めさ迷う猛獣となったこの俺をそんなことで欺けると思ったか…！！！！

アイスケースから抹茶アイスと棒付きソーダアイスを掴み、レジに駆け寄った。

さっき遠山が美術部だと言っていた少女は、何やらだいぶ待たされているらしい。

レジを譲ってもらい、会計を済ませた。

釣銭を受け取った直後、

「あ！先輩、コンチワ！」

と、軽い挨拶が俺にかけられた。

振り向くと、さっき雑誌コーナーに居た1年の野球坊主だった。

しかし、俺の知り合いにこんな奴は居なかったと思ったけど…？

俺が少し迷った顔を見ると、

野球坊主は、あ、わかりませんか？？と笑いながら言うてから、ス

ポーツバッグに引っかけていたキャップを被って見せた。

「……………？……………あ！」

「ああ！お前、中学の時同じ運動場掃除だった水戸じゃんか！」

何かひっかかると思ったが、髪型がまるつきり変わったので本当にわからなかった。

にしても意外と縁薄いな。

「お前、同じ高校だったんだ。しかも野球部か。中学でもそうだったっけ？」

水戸は照れ臭そうに、

「いやあ…、前は卓球部だったんですけど、最近野球に目覚めたんです！」

と言った。

その後少し話をきくと、水戸も俺同様アイスを買いに来たらしいのだが、どれにするか選びかねて、結局雑誌を読んでいたらしい。

：確か、中学時代、水戸は掃除中に見つけた500円を拾って先生に届けるか放っておくか迷ったあげくに、二年の奴に取られた事があったはずだ。

俺は三年で、ただ無関心にぼーっと見ていたが、当時一年だった彼は先輩に逆らうことも出来ず、500円を名残惜し気に見送っていたのだった。

そういう優柔不断な所は今でも全く変わっていないらしい。

「よし、じゃあ俺が選ぶ！」

そう言って、俺は水戸を連れてアイスコナーに戻った。

俺達がアイスケース前に立ち、フタを開けてアイスを覗きこんだ時、

コンビニの自動ドアが開いた。

「いらっしまい」

相変わらず素っ気の無い店員の挨拶。

それは途中で不自然に途切れたのだが、俺がその不自然に気付くのは数秒後の事だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9027b/>

夏休み戦争

2010年10月12日06時43分発行